第113回イーマ例会
重度の認知症でも3ヶ月で笑った、話した、歩いた
～心身機能活性運動療法について～
小川眞誠先生
平成25年7月17日

■講義：
親や家族がボケたり、認知症になり、病院で進むことはあっても完治はしないと断言された時に人の心は閉ざされると同時に絶望感が生まれ、勝手に諦めさせられる。

そんな状況を誰かが改善しないといけなく、その役割を担えればと考えている。
命あるものなので、虐待を受けずに生活を全うすることが理想。
病気の原因を把握し、病気になった原因を解決すれば良いだけのこと。
どんな病気にも必ず原因や動機があるはずなので、それに対応する。

病院でも治療薬でも治らない状態が日本では30年以上続いているのが現実。
診断するには症状から把握し、対応する。
4大疾患は認知症の大きな原因になっているが、色んな薬を飲み続けることで他の原因も生まれる。その結果、予想もしていなかった病気にも発展し得る。

本当は当協会が行っているこの療法が広く普及し、日本で喜んでいただきたい。
上海や他のアジアの国では人気が高い。それは誰に施しても結果が伴っているから。
色んな症状があっても改善策は一つで、心身は１つで脳と心と体は一体で、全体を観る。
開発した心身機能活性運動療法は国を問わず、指導士を養い誰にでもできるようになっている。海外の人たちに手本を見せ、実際に政府や病院を巻き込んで3時間の3ヶ月プログラムをやり続けると結果が出るので現地政府からも認められている。

薬を飲んでいる人には結果が伴いにくいため、プログラム期間中は薬を止めてもらう。
薬を飲んでいた人についても、少しずつ薬の摂取量も減り、最後は薬も必要がなくなる。
精神面も身体面も元気になってくるが、最初はマンツーマンが基本で、改善されてくるとグループワークに移行する。

日本では介護保険を徴収しながらも、介護サービスでは預かっているだけで、改善はされないことが問題。国民はデイサービスにも介護サービスにも税金を払うが、改善されないので、このままでいくと今後の日本は税金が高くなるはず。
家族の人を良くしたければ、家族の一員がまずは指導士になり、共に改善できるようにするのが当たり前で、お金を出せば良いというものとは違う。

■上海政府と提携して政府施設にて取り組んだ症例の映像（ＮＨＫ番組）：
・1対1での温熱療法。
・シリコンゴムによるフィンガースポーツで指先の末梢神経から脳に伝わる。
・フラハンドを使用した運動。前頭葉がしっかりしてくる。
・ビンゴ輪投げスポーツ。点数もきちんと自分で計算させて脳を使い、意欲を高める。
・ゲーゴルゲーム（開発した室内版ゲートボール）

■日本における事例：　参照：DVD(書籍購入者に送付)
いずれも同じ1つのプログラムで下記症状も改善。
・認知症
・脳卒中
・パーキンソン
・大脳形成不全
・脳障害児

■心身機能活性運動療法の実習風景

以上、以下余白